

観光の現状と課題

<統計データ>

- 観光入込客数の実人数では97%以上が日帰り客、最も多いのが5月で53,179人、次いで4月の44,431人。(平成29年度西多摩地域入込観光客数調査報告書)
- 令和2年度市政世論調査で観光事業の活性化が、「重要」、「どちらかといえば重要」と答えた方は全体の66.7%。
- 令和2年度市政世論調査で羽村市の魅力・羽村らしさを感じるものを尋ねたところ、①羽村の堰、②動物公園、③花と水のまつりが挙げられた。

<関係団体ヒアリング>

- 市内にお金を落としてもらえないものがないかを考えたい。売りに出来るもの一つは多摩川水系最上流の水田があるということ。こういう特徴を発信していきたい。
- 阿蘇神社・五ノ神社をパワースポットとして売り出せないか。
- チューリップに関するアンケートに「マンネリ化でつまらない」という回答があったことから、テコ入れと継続できる方法を考えて、色彩などに女性目線を取り入れた。その結果、見え方が変わり、実際には増やしていないが「毎年花が増えている」と言われるようになった。リピーターにも喜んでもらえるような考えを取り入れていきたい。
- 羽村は観光地としては、宿泊して観光するというレベルではないのではないかと。終日過ごせるものはないが観光資源はあると思うので、泊まらないにしても滞在時間を増やすことを考える必要がある。「花と水のまち」であれば、そのストーリーを作って観光資源を生かす必要がある。
- 市内に観光センターを作りたい。平地と山岳の間の羽村に都心から車で来て自転車に乗り換えて市内を巡る、または近隣自治体に行く観光客などの中継地点にしたい。チューリップ鑑賞だけで終わらず、近隣自治体も含め、地域を色々回ってほしい。
- インバウンドにも取り組んでいきたい。「旅行とは人の生活を見ること」と言われるが、そうであれば、市内に観光資源が無くては太刀打ちできるのでは。「何もない＝何かを作り出せる」。悪い面を見ずに良い面を見れば、羽村はとても良いところと思う。
- 羽村テラスみたいなものを多摩川べりに作っても良いのではないかと。
- インバウンドを取り込むにしても、先に市内の観光資源の開発やお金が落ちる仕組みを作っておくのが先ではないか、そうでないと羽村をハブにしたとしても利益が出ない。
- 観光ルートは青梅線以西に多いが、近くに昼食をとれる飲食店が少ない。その開発・育成について市にも協力してほしい。
- 宿泊業を始めて17年となる。創業当時、市内企業(製造業)の立地状況などを考え、ビジネスでのニーズを狙った。現在も宿泊者の大半はビジネス客。観光目的では奥多摩やゴルフへ行くというニーズ。羽村市内への観光で宿泊した人はいないのではないかと。
- 観光協会のガイド部会は、高齢で辞めるガイド部員が増えたが、若い人が入ってこなかったため昨年ガイド養成講座を行った。それにより4名の入会者があった。
- NPOでインバウンドに取り組んでいるが、そこでも「観光は暮らしを見てもらうこと」という意見はある。今あるものを磨くことも必要。羽村のものは日本人への訴求力は弱いと思う。阪急交通社が全国から選定した5つの観光候補地の中に「西多摩」があるが、自治体単位では成り立たない。西多摩・大多摩などの単位で人を呼び込む必要がある。
- 日野自動車やカシオ計算機(G-SHOCKを開発)と連携してお酒などが開発できないか。市内産さつまいもで焼酎を作ったり、日野自動車やカシオ計算機の人にお米を植えてもらって「G-焼酎」、「日野の2トン酒」というネーミングをつけるなどして売り出してみたい。
- 観光コースを設定すればハイキング客が来てくれるか。福生市などに行っている街歩きツアーでは、近隣を対象に集客している。武蔵村山市とは軽便鉄道の縁でコース作りができそう。JRには「駅からハイキング」を復活させたい様子が見られるので、小作～河辺間などのコースを提案していきたい。
- なるしまフレンド(スポーツバイク専門店、創業地が羽村市)の縁をもっと使えないか。
- インバウンドの取り込みで、外国人に「市内水田で稲刈り～おにぎりづくり・試食～お寺で座禅」という内容をコロナ禍以前に考えていた。話題になる観光要素を発信できれば集客できるのではないかと。
- 羽村を起点として西多摩地域に食事・観光に行く、日帰りで関東圏の世界遺産・重要文化財に行くなど、羽村をハブにして行先を選択できるようなツアーを開発できるか。自転車にしても羽村を出発点にすることを考えたい。
- マンネリが一番怖い。継続して人を呼び込める取り組みが欲しい。規模は小さくなくて良いので、単発ではなく継続性を優先していきたい。
- 羽村の昔の食事が食べられることや、はむらの売りである「水」を使ったものの開発など、「食」の取り組みをもっと考えていきたい。
- 一晩中サンバを踊るなど、これまでにない突き抜けた取り組みができないか。
- 羽村の魅力を広くPRしていきたいが、市民にも発信していきたい。先日、「軽便鉄道の跡を通ってみよう」という企画を実施し、親子4組の参加があった。そのうち1組でも自由研究のテーマとしてくれば、観光協会としても取り上げて発信していきたい。
- 玉川上水や軽便鉄道の学習について教育委員会に働きかけられないか。夏休みの自由研究で取り組む子どもが増えれば、観光協会としても何か支援できるのではないかと。子どもの目線を向かせるためには、まず大人(親)を呼び込む必要がある。
- 「たまたま検索でヒットしたから」と台湾から観光客が来たことがあったが、チューリップと桜をとても喜んでくれた。しっかりと発信して、来てもらえれば満足してもらえる。
- チューリップで言えば、有名な佐倉市と比べると羽村は株数は少ないが密度は上回るので撮影に適しているとのこと。テレビ局が「映像にするには羽村が良い」と選んでくれた。昭和記念公園など広いところでは何箇所も回らないと見られないが、羽村は1箇所で見られるという利点もあり、もっとPRしたい。「伝え方」と「何を伝えるか」を考えれば、もっと集客できるのではないかと。
- 檜原村は、様々な取り組みの発信が上手い。羽村も見習うべき。
- 市民でも市内のことを詳しく知っているとは限らない。市民にもアプローチしていきたい。
- コロナ禍での人の行動変化にも考慮が必要。均質的なものはオンラインでOKという認識に変化していると思う。リアルな部分は個性が必要。羽村で言えば製造業で、今後の製造業はSDGsがキーワードになると思う。日野自動車からトヨタも巻き込んで、「無人運転シティ」などの尖った取り組みができれば、人は集まるのではないかと。
- 多摩川沿いに歩いてきてすぐチューリップにアクセスできるのはいいところではないか、桜とチューリップが同時に見られるというのも他にない。
- 各産業分野をつなぎ、何を核にするかについては行政に旗振りをしてもらいたい。観光の方向性やビジョンを示すこと、ステークホルダーの取りまとめは市が担うべき。

抽出されるキーワード

観光資源

発掘、研究

ブラッシュアップ・活用

ストーリー性の創出

基盤整備

インバウンド対応

受入環境の充実

体制の充実

連携・交流

他地域との連携・交流

市内企業との連携

農商工観光連携

開発

羽村の「食」開発

体験型資源の開発

新たな取り組み

情報発信

強みにフォーカスした情報発信

子ども・親への情報発信

市民への発信

変化への対応

ニューノーマルへの対応

マイクロツーリズム